

**令和 7 年度**  
**岐阜県手話言語の普及及び意思疎通手段の利用促進に関する推進会議**  
**【結果概要】**

1. 日 時：令和 7 年 11 月 5 日（水） 14 時 00 分～15 時 00 分  
2. 場 所：岐阜県庁舎 303、304 会議室  
3. 趣 旨：「岐阜県手話言語の普及及び障害の特性に応じた意思疎通手段の利用促進に関する条例」に基づき、基本的施策に推進に向けて、意見・要望をいただくもの

**【主な発言】**

**令和 6 年度手話言語条例関連事業の取組状況について**

- 視覚障がい者の情報提供について全般的に関わっており、サービスを受ける側でもあり、提供する側でもある。特に意思疎通支援に関しては、情報提供についてしっかりやっていかないといけないと感じた。
- 今回の資料について、点字版の十分な資料を作成いただいた。また会議において点字版は見る速度に合わせて点字を探すのが大変なので、何ページ、何行目と言っていたため、他の委員と同じように会議に参加でき嬉しく思う。
- 岐阜県の小学校や中学校では、難聴の子どもを対象とした特別支援学級や通級指導等はあるが、弱視の子どもにはそういったものがない。そのため、盲学校の教員が小学校へ出向き、自立活動の授業を行う巡回型の通級指導を始めている。視覚障がいのある子どもは会話によるコミュニケーションは取れるが、黒板の字が見えないなどという課題があり、先生も十分に手当できていない状況があるので、子どもにとって大切な支援であると考えている。
- 今年 11 月 15 日から始まる東京デフリンピックのキャラバンが全国 47 都道府県を巡回するなかで、聞こえないことを多少なりとも理解してもらい、応援や温かい声援をたくさんいただいた。これを一過性で終わらせず、聞こえない人と聞こえる人が共に生きられる社会の礎となればよいと考えている。
- 若年層の手話通訳者の養成について、30 歳くらいまでの方を対象に養成を目指している。大学生や教員を目指している方が教員になった際に、ろう学校だけでなく、色々な学校に出向いた際に聞こえにくい子どもの支援や手話についての話ができ、それは大きなことにつながると思う。
- デフリンピックについて、岐阜県の代表は、岐阜市の方が選ばれていることが多いが、東濃圏域や飛騨圏域でも対象の方がいるが、情報が入っていないため、知らないのではないか。そのあたりを今後課題として捉え、解決に向けた道筋ができればいいと思う。
- ろう学校では、聴覚障がいの子どものいる幼稚園から小中高等学校に職員を

派遣し、子どもや先生に対する支援を行っており、近年では聴覚障がいのある子どもの高等学校進学の数が増えている状況。

- 授業中に先生が話す言葉が文字化される「LiveTalk」の貸し出し要請が近年多くなってきている。
- 自立活動等で自分の障がいについて、どんな困り感があるのか、どんなことが社会に出たときに不便なのか、必要な合理的配慮とは何かを事前に学べるような学習が今後出来たらよいと考えている。
- ろう学校でも夏休みを利用して小学生や中学生を対象に手話教室を行っており、年々、手話に興味を持つ子どもが増えてきているが、継続的に手話の技術を習得するところまでは進んでおらず、継続的な学びにつなげるために、色々な関係機関と連携して学習ができればよいと思う。
- 聴覚障がいの方の社会進出について、多くの場合は先輩のいる企業への就職がメインとなっているが、近年、地元での就職を希望する方が増えてきた。地元の企業は今まで聴覚障がいの方を採用したことがないところも多く、今後は企業に対して聴覚障がいがどのようなことかを理解してもらう学習会を開けたら良いと考えている。
- 多くの企業で障がい者の雇用については前向きに検討しているのが現状と考えている。ただ、企業の思いと障がい者との接点をどう作っていくのかが難しい課題であり、民間企業と障がい者との橋渡しをどうしていくのか、その取組のプラットフォームが出来ると、企業の中で障がい者の活躍のチャンスがますます増えると思う。
- 盲ろう者の実数に対し、登録者数及び派遣者数が少ないが、本人や家族の意向で登録されていないことがある。
- 盲ろう者の通訳介助の養成について、高齢化も進み、退任する方も増えてきているため、この先通訳介助者が不足することが想定されるので、掘り起こしに協力をお願いしたい。
- 失語症の難しいところは、個人で症状が全く異なる点にあり、外見からはわからない点である。失語症の理解が広がり、就職の場も増えると良いと思っている。ほとんどの人が、電話が苦手ということで、就職が難しいため、そのあたりのことに理解してもらえらる社会になればいいと思う。
- 最近の新聞で合理的配慮の特集があった。この中で、病院での場面が描かれており、病院の中でも手話通訳者がいないなどまだまだ理解が進んでいないのではと感じた。引き続き普及啓発に努めていきたい。
- 障がい者だけでなく、外国籍の児童とコミュニケーションを取ろうとしたときに、ゆっくりはっきり丁寧に話すということを心がけている。特別な研修等は行っていないが、意思疎通というのは、言葉はわからなくともジェスチャーとかそういう気持ちで伝わるところもあるのかなと思っている。
- 障がい者に学校に来ていただき、子どもたちと一緒に過ごす時間があればよい。障がい者との交流活動などを積極的に行っていきたい。

- 障がい者から、高齢化により一人になったときは心配といった意見や、声をかけても聞こえないから無視されたと思われなかが心配との意見があった。
- 3年ほど前に、学生たちのピアサポートという形でノートテイクの養成を行った。全国の大学とタッグを組んで、オンラインでノートテイクができることを進めているが、ノートテイクをしてくれた学生に報酬を払うなど、予算もかかる話で、意思のある学生、活躍の場を求めている学生はいるが、なかなか続けていけない状況を実感した。このような取組には予算を付けていただき、県でも宣伝していただき、理解を進めていきたいと思う。
- 他県の取組の情報提供として、1つ目は緊急時のメール等について、警察や消防に連絡をするシステムが最近出来上がりつつあるが、市町村独自で行っていることが多く、他の市町村へ移動した時は連絡ができなかった事例がある。共通のアプリケーションが使えるようになると良い。
- 2つ目はタブレットを使ってのリレーサービス等について、平常時は使えるが、災害時は電気やインターネット回線がつかないことがあり、コミュニケーションがうまくいかないなどがある。ぜひその点を検証し、災害時でも使える環境を整えるとよいと意見があった。